

表面張力

雨の予感が
くう空を舞うシテを
遥かな視線に沿って運び
時はねじれるかのように振る舞い
おしなべて
人は気づかぬうちに
街を
その艶麗に薄く漂いたなびく無に対する触感で自ら満たしてゆく
そと
そと...

生は息づくか
白く磨かれてひんやりとした岩と

温かい肌は漂泊を促す
我はぬくもりを盗み歩く者なり

天蓋を覆う雲から雲へと渡り歩くまいびと舞人
その衣から撒き散らされる夢幻の種子

目の当たりにする肢体は反り返り
私が抽するものを呑み込んでゆく
喜悅とも苦渋とも定かならぬしびれとともに
舌なめずりして

雨の予感が導くのか
雨が待ち受けている
雨
雨... その表面張力が世界を見下ろしている

(2001.11.3)